

【事業実績】

京都国立近代美術館を中核として、地域の大学、盲学校、視覚障害者と協働しながら、視覚だけに依らない新しい美術鑑賞プログラムの構築とその成果発信のため、主に以下の取り組みを行った。

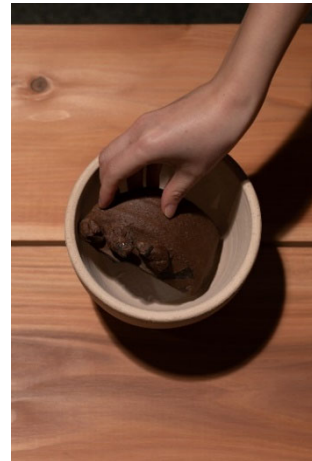
※事業ウェブサイト：<https://www.momak.go.jp/senses/>

■ 障害のある方と協働した鑑賞プログラムの開発

作家[Artist]、視覚障害のある方[Blind/ Partially sighted]、美術館[Curator]の三者連携により、「見る」ことだけに依らず、誰もが楽しめる鑑賞プログラムの開発を目指す「ABC プロジェクト」を立ち上げた。

ツボノナカハナンドロナ？

本年度は作家の中村裕太と協働し、ABC がそれぞれの専門性・感性を生かして協働し、陶芸家・石黒宗麿の作品を、さわる・対話する・聞くなどの方法で鑑賞を深めるプログラム「ツボノナカハナンドロナ？」を開発した。手で触れて鑑賞を深める「ツールボックス」（壺と石黒の陶片から構成される）を新たに制作し、それを用いた体験型展示を美術館にて実施した。



（左上）八瀬での陶片発掘の様子
（その他）ツールボックス「ツボノナカハナンドロナ？」
およびそれをもちいた体験型展示の風景

さらに、石黒の陶片について、ABC それぞれの立場から読み解きを紹介するウェブサイト「ABC コレクション・データベース 石黒宗麿陶片集」を新たに立ち上げたほか、インスタグラムでのライブ配信も実施し、来館が難しい方に向けても本プロジェクトPR する可能性を模索した。

「ABC コレクション・データベース」

<https://www.momak.go.jp/senses/abc/ishiguro/>

石黒宗麿の陶片について、作家（Artist）、視覚障害のある方（Blind）、学芸員（Curator）がそれぞれの視点から紐解いたウェブサイト。

陶片に触れる音、触れた時のつぶやき（音声）、陶片の細部まで見ることができ高精細画像、ABC それぞれのテキストなどを掲載し、身体感覚をつかって陶片を味わうコンテンツを目指した。



■ 「さわる鑑賞ツール」の制作

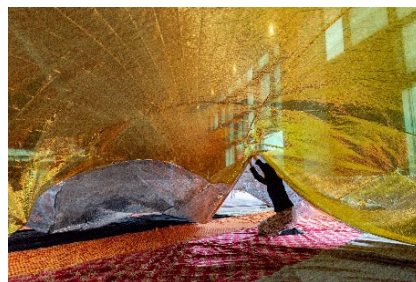
一人でも多くの視覚障害者が美術に触れ、美術館への来館のきっかけとすることを目指し、所蔵作品についての「さわる鑑賞ツール」の制作を行った。既存のエンボス印刷のさらなる技術開発を伴うプロジェクトとして、印刷会社スタッフと、エンボス印刷のための版の元となる模刻（半立体レリーフ）を制作する彫刻家と協働し、所蔵作品2点（日本画・洋画、各1点）について、第一弾のサンプルを制作した。



（左から）作品選びの様子／エンボス印刷の試作品（吉原治良作品）／エンボス印刷の版のための模刻（竹内栖鳳作品）

■ 身体感覚で楽しむプログラム

本事業の発展的展開を見据え、視覚障害のある方に限らず聴覚障害者、精神障害者など多様な方が美術館により来館しやすくなることを目指した試行的な取り組み。精神障害やリハビリテーションの問題を扱う作家・大崎晴地と連携し、触覚・嗅覚・聴覚といった身体で楽しむ体験型作品「ねじれの巡礼」を美術館ロビーに設置し、あわせてオンラインで楽しめる作品を公開した。美術館へは合計 981 名の来場があり、オンライン作品には 477 回のアクセスがあった。



■ 過去事業の継続的な実施（盲学校と美術館との連携事業）

盲学校における鑑賞教育の充実を目指し、京都府立盲学校と京都国立近代美術館が連携して、平成 30 年度から実践を続けている。本年度も学校のニーズを踏まえながら授業内容を検討し、高等部生徒 4 名を対象に、「石をつくろう！ 建築における材料の表現・石の表現」を行った。新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、美術館・講師と盲学校をつないでオンラインで実施した。

企画展の出品作品（建築の外壁レリーフのレプリカ）を手で触れて鑑賞してもらったあと、作品と同じ技法で「石」を制作する活動を行った。手の感覚をフル活用して本物の作品を鑑賞するという例年重視してきた要素を土台としながら、建築、デザイン、歴史にも関わる分野横断的な内容とすることができた。

